

荒川ふるさと文化館 令和5年4月1日に展示室再開!

展示の一部を
リニューアルして

荒川ふるさと 文化館だより



荒川区教育委員会
荒川ふるさと文化館
荒川区南千住6-63-1
TEL03(3807)9234
登録(04)0140号

「船鑑」(国立国会図書館デジタルコレクション)

お知らせ

あらかわ伝統工芸ギャラリー展「はばたけ! 若手職人展」

荒川ふるさと文化館蔵資料展「速報! あらかわの文化財展」

4月14日(金)~6月7日(水)
4月22日(土)~6月4日(日)

開館25周年の荒川ふるさと文化館 平成10年5月に開館した荒川ふるさと文化館は、皆様に常に新しい情報を提供するため、企画展や館蔵資料展の実施に加え、「あらかわ伝統工芸ギャラリー」の開設(平成29年5月)、さらに「奥の細道と千住」コーナーの新設(令和元年8月)などを行ってきました。今回は、天井工事に伴い、常設展示の一部をリニューアルしましたので、その内容をご紹介します。

原始ゾーンに新たな出土品 『荒川ふるさと文化館だより』第46号でも紹介した、町屋四丁目実揚遺跡M地点から見つかった弥生時代終末期から古墳時代初頭の土器を新たに展示します。壊れている部分が少なく原形を保っている壺3点は、その大きさも含めて貴重なものです。丸みを帯びた形状で、赤彩や文様が施されています。真横から見やすい展示ケースなので、ぜひ色々な方向から観察してください。また、取り外していた延命院貝塚と道灌山遺跡の土器も再展示します。

グラフィックパネル張替え 展示室入ってすぐ右側、古代・中世ゾーンの「街道を旅するひとたち」と近世ゾーンの「千住大橋」「川と交易」のパネルを、開館後の研究成果を踏まえて新しくしました。荒川区域が交通の要所であり、歴史的にも重要な場所だったこと、街道や川からヒトやモノが運ばれ文化が伝わった歴史を知ることができます。

解説装置の再開 新型コロナウイルス感染症感染拡大防止のため使用を取り止めていた装置を再開します。

小塚原村絵図装置 江戸時代の地図「小塚原村絵図」を楽しく読み解くための装置です。手元のパネルから街道や宿場などのテーマを選ぶと、画面が光り、解説が表示されます。

「近代のあゆみ」映像コーナー 荒川区の近代化の歴史を約5分間で、分かりやすくまとめた映像です。

史跡文化財データけんさく装置 「地域めぐり」「史跡辞典」「おはなしBOX」などから区の史跡・文化財や伝説を学べます。

荒川ふるさと文化館はこれからも荒川区の歴史や文化を楽しく学ぶことのできる施設として、さまざまな取り組みを行ってまいります。

企画展こぼれ話 ⑭

きれいな水が

届けられるまで

昨年11月、当館は企画展「カメラがとらえたあの日の場所」Arakawa Photo History」を開催した。今回は企画展で取り上げられなかった古写真のうち、昭和3年（一九二八）に東京府江戸川上水道村組合が発行した『江戸川上水道誌』掲載の古写真を紹介したい。

三河島の鉄管検査 写真1のキャプションには「鉄管検査（三河島試験所）」大正十一年十二月二十三日撮影」と書かれている。横倒しになった巨大な鉄管の後方には、制服姿の

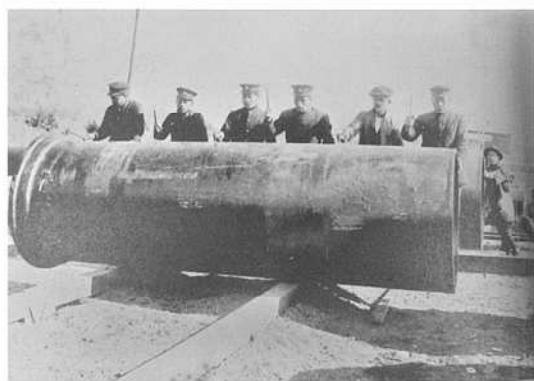


写真1 鉄管検査（三河島試験所）

6名が、手持ちのハンマーで鉄管を叩いている。鉄管を転がしながら打音検査をしているようだ。

水道組合の誕生 ではこの鉄管は何に使用されるのか？ 東京市による近代上水道が初めて通水したのは明治31年（一八九八）だが、市外にあたる東京市の周辺9郡部では、新たに町営・町村組合・民営等により水道事業が開始された。その一つが東京府江戸川上水町村組合である。

大正8年（一九一九）、農村から工業地帯へ変わりつつあった北豊島・南足立・南葛飾郡域の12町村は、飲用水等の供給のため近代的上水道の設置を目指し、同組合を結成した。現荒川区域では、南千住町・三河島村・日暮里町・尾久村が参加し、昭和7年に東京市水道局に統合されるまで地域の水需要を支えた。水源は江戸川で、浄水場は現在の金町浄水場。水の供給エリアは広域に及び、水圧に耐えられるなどの試験に合格した鉄管を使用する必要があった。三河島汚水処分場（現荒川八丁目）の土地の一角を東京市から一時借入れ、三河島試験所とし、水圧試験機を設備して、鉄管試験場としたという。

南千住の消火栓 次にもう一枚、写真2をご覧いただこう。キャプションには「消火栓試験（南千住町）」「大正十五年九月撮影」とある。中

令和4年度

荒川ふるさと文化館の活動

文化財保護活動

令和4年

4月15日～6月8日 あらかわ伝統工芸ギャラリー展示「はばたけ！ 若手職人展」

4月21日 第1回区文化財保護推進委員会

4月23日 令和3年度区登録・指定文化財登録書・指定書交付式

4月23日～6月12日 館蔵資料展「速報！ あらかわの文化財展」

4月30日（速報展関連）ワークショップ「首切地蔵を作ろう」江戸のペーパークラフト」

5月7日（速報展関連）展示解説

5月12日 区指定有形文化財・標柱設置（円通寺「彰義隊関係追悼碑群」）

5月15日（速報展関連）史跡探訪「彰義隊の墓を訪ねよう」

5月22日（速報展関連）「伝統に生きる」上映会&ミニトーク（漆塗・角光男）

5月31日・6月7日・14日・21日 古文書に親しむ初級編

6月10日～9月7日 あらかわ伝統工芸ギャラリー展示「金工・諸工芸」

6月11日（速報展関連）文化財講座「中世のあらかわ」板橋区教育委員会文化財係学芸員・吉田政博氏、新宿区立漱石山房記念館学芸員・今野慶信氏

6月16日 第2回区文化財保護推進委員会

6月25日～7月10日 成田市主催「関東の山車人形と成田祇園祭展」区指定有形民俗文化財の三河島山車人形・稲田姫と熊坂長範出展

6月～9月 博物館実習生受け入れ

7月2～3日 第41回あらかわの伝統技術展（荒川総合スポーツセンター）

7月6日 南千住図書館合同イベント「七夕おはなし会」

7月27日 区文化財保護審議会（諮問）

8月3日・7

日・18日・21

日・23日 夏休

み子ども博物館

「リトル学芸

員」、「勾玉作り

にチャレンジ」

（八代龍門氏）、

「俳句を作ろう」

（倉澤節子氏、

市橋洋子氏）、あらかわ職人道場「銅の

しおりを作ろう」（福士豊二氏、「衣裳

着人形の生地でカードケースを作ろ

う」（竹中温恵氏）

8月18日 第3回区文化財保護推進委員会

9月9日～12月18日 あらかわ伝統工芸

ギャラリー展示「木工・竹工・諸工芸」

9月13日・28日 区文化財保護審議会部

会調査

9月30日 『荒川ふるさと文化館だより』

第48号刊行

10月4日・11月8日・12月6日 古文書

に親しむ中級編

10月4日～11月29日 あらかわ学校職人

教室（区内小学校23校で実施）

10月20日 第4回区文化財保護推進委員会

10月29日～12月4日 企画展「カメラが

とらえたあの日の場所」Arakawa

Photo History」

10月29日・11月26日（企画展関連）展

示解説

11月2日・12月14日 伝統芸能等記録映

像撮影（蓮田子育地蔵縁日等）

11月3日・5日・6日 荒川区伝統工芸

技術保存会主催「あらわ座市」

11月3日 あらわ座「魅せる額縁の技」

（吉田司氏）

11月12日（企画展関連）記念講演会

「華族が写した明治の東京（東京都江戸



第41回 あらかわの伝統技術展



写真2 消火栓試験 (南千住町)

央の高い塔は、消防の火の見櫓、右に南千住町消防組の消防自動車が見える。左脇の鳥居は素盞雄神社で、ホース後方に消火栓があり、空に勢いよく放たれた様子から十分な水圧が得られていることがわかる。

消防用水と上水道 『江戸川上水道誌』には、江戸川上水町村組合を設立する経緯が記されているが、理由の一つに「消防用水の不足」が挙げられている。それによると、当地域は人家が多く、用水不足のため、文明の利器である消防自動車駆けつけても十分活動することが難しい。また、これまで消防自動車は川の水・下水・井戸水等を使ってきたが、東京のようにわずかな井戸の水位では不向きである。川が近ければ川の水を利用するが、大抵は工場排水が流れこんでいるため非常に不純物が多く不衛生である。下水に至っては言うまでもない。消防士がやむなく道端の排水溝の水を使用すると、臭気がすさまじく、家屋や家財

道具に放水された者は、焼け残った喜びもつかの間、付着した汚水を洗い流すのに非常に手間を要したという。また様々なものが混じった汚水を消防自動車に使うと、金属は腐食し、ギアやポンプには砂が入り込み故障してしまうありさまであった。

しかし、消防署長談話によれば、江戸川上水道の新設消火栓は、悪影響もなく、放水射程も優秀であると書かれている。大正時代は、東京に消防自動車導入された時期で、写真2は消防方法の近代化とともに上水道が整備されていた時代の写真と言えそうだ。

街角に残る組合の水止栓 最後に、現在も見られるこの組合の名残を紹介しよう。第二峡田小学校附近(現荒川二丁目)にある路上の小型の鉄蓋(写真3)である。これは江戸川上水町村組合の水止栓で、「水止栓」の文字上のマークは、「エ」「ト」「川」「水」の4文字を意匠とした組合の紋章であり、『江戸川上水道誌』の裏表紙にも使われている。同様の鉄蓋は他にも区内に存在する。街の成り立ちを知ることが出来る貴重な近代遺産の一つといえるだろう。

〈高柳吟音〉



写真3 水止栓の蓋

史跡探訪
「古写真の場所に立ってみよう」

12月19日 令和5年3月31日 天井工事・リニューアルに伴い展示室閉室
12月27日 区文化財保護審議会(答申案) 令和5年
1月5日 4月12日 あらかわ伝統工芸ギャラリー展示「文字・人形・木版画・諸工芸」
1月19日 第5回区文化財保護推進委員会
1月29日 あらかわ座「パッチンどめの髪飾りを作ろう」(戸村絹代氏)
2月4日 12日 荒川区文化遺産地域活性化推進事業運営委員会主催事業「三河島・山車人形の組立公開・展示、講演会」「三河島山車人形の魅力」(東京理科大学教授伊藤裕久氏他)
2月6日 3月3日 町屋四丁目実揚遺跡N地点本調査実施
2月7日 区文化財保護審議会(答申)
2月12日 出張あらかわ座「お祭りを彩る文字」(前森宏之氏)
2月15日 区文化財保護審議会(文化財調査)
2月24日 令和4年度荒川区登録・指定文化財告示【指定】有形文化財(歴史資料)石造七重塔(円通寺)、無形文化財(工芸技術)桐たんす(村井正孝氏)、無形文化財(工芸技術)桐たんす仕上げ(村井泰雄氏)【登録】有形文化財(古文書)伊藤家文書
同日 史跡説明板建替え「夜念仏供養板

碑(地藏寺) 3月3日 伝統工芸技術記録映像「伝統に生きる 鍛金 福士豊二」完成
3月11日 12日 奥の細道矢立初めの地子ども俳句相撲大会千秋楽動画撮影
3月16日 第6回区文化財保護推進委員会
3月19日 あらかわ座「江戸のデザイン文字の魅力に触れる」(中村泰士氏)
3月22日 令和4年度区登録・指定文化財登録書・指定書交付式
同日 史跡説明板修繕(カンカン森通りと猿田彦神社)
3月31日 『荒川ふるさと文化館だより』第49号刊行

〔埋蔵文化財報告書刊行のお知らせ〕

『道灌山遺跡G地点』、『町屋四丁目実揚遺跡M地点』の報告書が刊行されました。区内各図書館でご覧いただけます。

表彰関係

・瑞宝章 指物・渡辺光氏(区登録無形文化財保持者)
・東京都優秀技能者(東京マイスター) 知事賞 鍛金 福士豊二氏(区指定無形文化財保持者)・七宝 島山弘氏(区登録無形文化財保持者)
・映電アワード2022 ソーシャル・コミュニケーション部門優秀賞「伝統に生きる」あらかわの工芸技術―漆塗 角光男」
・東京都広報コンクール 映像部門最優秀賞「伝統に生きる」あらかわの工芸技術―漆塗 角光男」

訃報

●荒川区指定無形文化財保持者(工芸技術・刷毛) 齋藤正一郎氏は去る令和4年12月12日に逝去されました(享年86歳)。
謹んでご冥福をお祈りいたします。

職人ごぼれ話 ⑮

額縁職人が語る
高橋由一の《鮭》の額高橋由一《鮭》
画像提供：東京藝術大学/
DNPartcom

《鮭》の画家高橋由一 これは日本で一番有名な鮭、幕末・明治時代に活躍した高橋由一が描いた油絵《鮭》（重要文化財。東京藝術大学蔵）である。日本人としてはじめて本格的に油絵を描き、リアリズムを確立した画家と言われる。晩年、明治24年（一八九一）に北豊島郡日暮里村元金杉（現東日暮里五丁目竹台高校付近）に転居して制作活動を行い、ここが終の棲家となった。由一はあらかじめ所縁の画家なのである。

額縁職人の絵画鑑賞 ところで、この《鮭》を鑑賞する時、みなさんはどこを見るだろう。ほぼ間違いなく由一が描いた《鮭》を見ているに違いない。しかし、職業がなせる性なのか、つい額縁に目が行ってしまう人がいる。作品の保護と装飾のための額縁を製造している吉田一司さんだ。吉田さんは名古屋の老舗・三角堂で額縁製作のうちの「纏め」の修業を積んだ後、父・吉田吉治氏（元区指定無形文化財保持者）に師事して工房・富士製額を継いだ。荒川の匠育成事業を活用して弟

子を育て、額縁の技術の次世代への継承に取り組んでいる職人さんである。

高橋由一の《鮭》、そして額 そんな吉田さんが、昨秋に東京藝術大学美術館で由一の《鮭》に向き合った際の思いを述べている。

「私は額縁屋だから、額や表装に目が行くのは至極当たり前である。様々な人が、様々な立場で鑑賞する中の一人として私の話を聞いて欲しい。高橋由一の代表作、鮭。江戸末期の日本は、版画や日本画、中国画が美術だった。美術、芸術、という言葉すら無かった。ある日、高橋由一は西洋の石版画に強い衝撃を受ける。高橋由一自身は一度も留学せずに、日本に洋画を広めようと使命感に燃えていた。それは、高橋由一後に出てくる日本人の洋画家とは一線を画している。純粋な和製油画の写実だからだ。その《鮭》を皆さんは鑑賞されるわけだが、額もご覧頂きたい。」（吉田一司氏 Facebook より）

あらわ座で語られた《鮭》の額 当館一階のあらわ伝統工芸ギャラリーでは、「あらわ座」と称して職人の実演・体験・解説等を組み合わせたワークショップを開催している。コロナ禍で長らく中止になっていたが、昨年11月に再開する運びとなり、《鮭》の額も見たいと訴えた吉田さんに再開一回目の講師をお願いした。

テーマは「魅せる額縁の技」。父・吉治氏の記録映像「伝統に生きる」を使って製造方法を説明した後、本題である高橋由一の《鮭》の額縁の解説をし、由一のオマージュ展に出品した区内在住の二人の画家（初井基・皆川琴美両氏）の作品に使われた額（洋

額の草分け磯谷商店の額縁と吉田さんが手がけた額縁）を事例に、日本の近現代の額縁の世界を説明していただいた。参加者からの質問もあって活気溢れたワークショップとなった。

その中で吉田さんは由一の《鮭》の額について「額にも当時の職人が苦しみながら完成を学んだ跡がある。外側のレリーフは洋風ではあるが、紛れもなく日本の伝統に沿った、平面を基調とした彫りで、精緻であるがゆえに日本を飛び越えてはいない。一見西洋風でありながら、西洋では見ることが出来ない、抑揚のない平坦な彫りが特徴である。しかし、この時点で見事に日本独自の額を作り上げている事に驚く。絵画の意図する西洋の文化を和様に見事に取り入れているのである。西洋を模索して描かれた鮭と額は見事に呼吸があっている」と語り、磯谷商店が岸田劉生と劉生額を製作したように歴史に残る額を作りたい、という言葉で「あらわ座」をしめた。額縁の技術伝承 富士製額は作家や作品にマッチした額縁を製作する工房として知られている。今回の「あらわ座」を通して、吉田さんの額縁製造に向かう姿勢が、近代の額縁が発する職人の声に耳を傾けることから得られたものであることに気付いた。近年、東京藝術大学等により日本近代の洋風額縁の研究が進められている。額縁の技術伝承に取り組みむ吉田さんはその研究成果を心待ちにしているに違いない。

《野尻かおる》

【参考文献等】『近代洋画の開拓者 高橋由一』（東京藝術大学美術館、二〇二二年）、文化庁国指定文化財等データベース <https://kunshitei.bunka.go.jp/heritage/detail/201/2332> 他